

平成23年度
入学試験問題

国 語

特待生
後期

受験番号	氏 名

中村中学校

□ 一の 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- (1) 父はヨウシヨウのころ病弱だったそうだ。
- (2) 合格のロウホウがとどいた。
- (3) トウブンをひかえた食事を作る。
- (4) 川のリュウイキに平野がひらける。
- (5) ホケツ選手として登録される。
- (6) 商店街がキョウサンして花火大会をする。
- (7) 昔からデンシヨウされてきた歌を聴く。
- (8) Tシャツがチヂンでしまった。
- (9) 池につり糸をタラス。
- (10) 取れたてのりんごをかごにモる。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

思い込みには、大別すると二種類あるようだ。一つは、一般にもよく指摘されるものといえる。それは、自分で嫌いだと思いついでいるものに対する不合理な(あるいは妄信的な)拒否反応だ。子供が嫌いなものを絶対に口にしない、よく観察されるシーンである。

「騙されたと思って食べてみなさい」というような説得をした経験がないだろうか。しかし、大失敗に懲りているのか、絶対にそれに近づきたくない、という固い決意が過去に生まれたのである。人間

関係でいえば、I などもこれである。

② こういったことは、人間だけでなく、動物にも広く観察される傾向で、本能的な自己防衛の手段なのだろう。一度危険だと認識したものに對しては、二度と近づかないように注意をする。慎重というか用心深いというのか、とにかく馬鹿にできることではない。だが、人間は少なくとも動物よりも賢い。思考力も分析力もはるかに高いレベルのはずである。慎重なのにこしたことはないが、度を越した頑なな拒否反応は、必ずしも賢明とはいえないだろう。

どんなものでも変化をする。環境が変わり、自分を取り巻く状

況が変わり、そして自分自身も成長して常に変化している。嫌いだと決めつけた対象と自分との関係だって、ずっと変化しないはずはない。だから、あるとき「もう一度試してみようか」という気分になって、実際にやってみたら、「なんだ、べつに悪くないじゃないか」なんてことが少なくなる。

嫌いだったものが一転して好きになる場合も多い。この経験は誰にでも必ずあるはずだ。そういうときに、「II」と感じることも多いだろう。

一度試して駄目だったものなら、まだ一応の根拠があるわけで、しかたがないかもしれない。実は、思い込みの多くは、一度も試されていないものなのである。経験していないのに、レッテルを貼ってしまうのだ。そのときに作用したものとは、単なる誤認だったり、遠目に見た僅かな観察に基づく勝手な印象だったり、それとも他人からの伝聞や噂の類だったり、a 誰かから指摘されたことだったり、いろいろなケースがある。

世の中には無数の可能性があるわけだから、全部を自分で試すことはできない。b 自分に入ってくる情報によってさっさとレッテルを貼って整理しないと落ち着かない。そうやって仕分けをして、安全な環境を構築するわけである。鳥が樹の上に作る巣みたいに、

これはOKだろうというものを集めてきて、それらで周りを囲い、人はその中で生きていこうとする。情報が多すぎるから、とりあえず「嫌いそうなもの」には無関心になるしかないのである。

このように、「決めつける」「思い込む」というのは、Ⅲの整理であり、思考や記憶の容量を節約する意味からいえば合理的な手段かもしれない。

しかし逆にいえば、頭脳の処理能力が低いから、そういった単純化が必要となるのである。動物がこの傾向を示す理由は、人間よりも脳の処理能力が低いため、これはしかたがない。c 人間だっ

たら、もう少し柔軟になれるはずだと思う。決めつけず、柔軟に対応する方が明らかに得なのだ。(A)

歳をとるほど思い込みが激しくなるのは、間違いなく頭脳の劣化によるものだろう。一度決めたことを蒸し返して再考したくない。

ようするに、「もう考えるのが面倒だ」と感じるようにだんだんなる。

しかし、考えること、行動することは、d 生きていくこと

にはかならないわけで、考えることが面倒だ、行動することが面倒だ、などといったいたら、生きていくことが面倒だ、というところへ行き着いてしまう。現にそのとおり、そういう人はどんどん老け込んでいくだろう。死んでいる状態に早く近づこうとしているのだから。

それが悪いといっているのではない。世の中には、早く死にたいと願っている人だっている。本人が強く望んでいるのならば、基本的にすべては自由だ。でも、無意識のことだったら、もったいない話である。④ 気がついた方がよい。

自分はそれには向かない、それは苦手だ、と思っている対象を完全に排除するのは、自分の可能性をそれだけ制限していることになる。それは、いかにも不自由ではないだろうか。(B)

無理に確かめるとはいわない。常に、視野を広くするため、自分の視点から離れ、もっと高い位置から眺め、すべての可能性を自分の将来の選択肢として持っている方がよいのではないか、ということである。

駄目だと思っていたジャンルの中に、実は面白いものが生まれているかもしれない。そういうケースはよくある。「そちらは見ない」と決めず、たまに見回してみることは無駄ではない。(C)

⑤ 僕は書店で雑誌を沢山購入する。さまざまなジャンルの雑誌を買ったことにしている。普段まったく関心のない棚へも見て、表紙に書いてあるコピーを読んだりする。

インターネットでも、ネットサーフィンという言葉が流れた。リンクを辿っていき、まったく違ったジャンルの情報に触

れるアドベンチャは、少々の時間を消費する価値はあると思う。アンテナを張って、面白そうなものをいつも探す姿勢である。

これをさせるのは、「好奇心」だと思う。まだまだ知らない世界がある。そこへ足を踏み入れてみたい。ひよっとしたら、自分が今熱中していることに関連するようなヒントが、まったく別のところで発見できるかもしれない、という予感に誘われる。インスピレーションを拾うための旅と呼んでも良いだろう。

まるで、流れ着いたものを眺めながら海岸を歩くような行為である。まさに、自由がなせる技といえる。(D)

(森博嗣『自由をつくる 自在に生きる』)

※妄信……わけもなくただ信じること。

※レッテルを貼ってしまう……「レッテルを貼る」とは、一方的な

評価をすること。

※ジャンル……種類・分野。

※リンク……関連した情報へとつながっていくもの。

※インスピレーション……ひらめき。

問一 —— 線①「経験」の頭に打ち消しを表す漢字をつけたとき、

同じ漢字を用いるものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、自然 イ、開発 ウ、意味 エ、常識

問二 I にあてはまる言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア、我慢 イ、束縛 ウ、支配 エ、絶交

問三 —— 線②「こういったこと」の内容を表している部分を、

本文中から四十字以内で探し、最初と最後の四字を答えなさい。

問四 II に入るものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、思い込みで敬遠していて損をしたな

イ、こうなったら受け入れるより仕方がないな

ウ、本当はもともと嫌いではなかったのだな

エ、はじめから物を見きわめる目が必要だな

問五 a d に入る言葉を次から選び、それぞれ記号で

答えなさい。

- ア、だから イ、でも ウ、すなわち
エ、そして オ、あるいは

問六 Ⅲ にあてはまる一語を、本文中からぬき出して答えなさい。

問七 ——— 線③「単純」の反対語を漢字二字で答えなさい。

問八 ——— 線④とありますが、どのようなことに「気がついた方が
良い」と筆者は言っていますか。それを説明した次の文の
空らんにあてはまる言葉を、本文中からそれぞれぬき出して
答えなさい。

思考、行動そのものを 1 だ、ということは、 2
を否定することになり、つまり 3 に近づくことになる
のだということ。

問九 ——— 線⑤とありますが、

(1) この行動を通じて筆者は何をしようとしているのですか。「視野」「可能性」という言葉を用いて、五十字以内で説明しなさい。

(2) この行動を直ゆを用いて表現している一文を探し、最初の五字を答えなさい。

(3) この行動の原動力となるものは何だと筆者は考えていますか。本文中の一語で答えなさい。

問十 次の一文は本文中の(A)～(D)のどこかに入るものです。

入れるのに最も適当な場所を記号で選び、答えなさい。

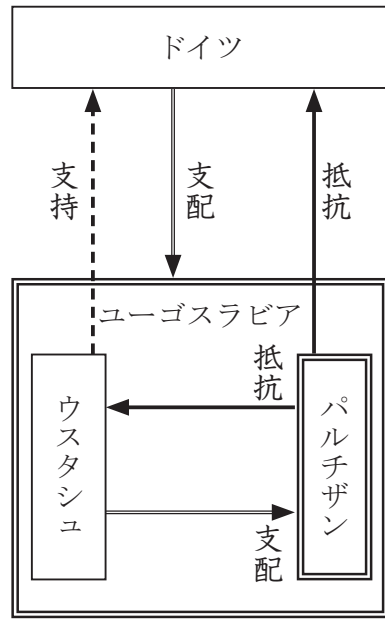
好奇心は、「自由」の非常に大きな効用の一つだろう。

三 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

次の物語は、筆者（マリ）と、筆者の旧ユーゴスラビア出身の友人（ヤスミンカ）の二人に、ヤスミンカの父（僕）が語って聞かせたものである。

この物語に語られている当時のユーゴスラビアは、ドイツに支配されており、本文に出てくる「ウスタシュ」は、ドイツ支配を支持するグループである。ウスタシュはドイツ支配に抵抗する人々を捕まえては処刑していたが、そんなウスタシュに抵抗し、ドイツ支配からの解放を目指していたのが「パルチザン」である。



僕が、なぜ一五歳の若さでパルチザンに加わって山に入ったか、そのきっかけになった出来事をお話ししよう。ちょうど、僕がマリさんやヤスミンカと同じぐらいの年頃に起こったことだからね。

それは、ボグダーノビッチ先生のおかげなんだ。僕の通っていた

中学の教師で、[※]風采の上がらない初老の男だった。頭頂部が禿げ上がったいて側頭部にわずかに銀髪の塊が残っていたかな。灰色の瞳に丸眼鏡をかけていた。いつもゆっくりと小さな声で授業を進めた。時々、口をつぐんで人生に疲れ果てたような眼差しをわれわれ生徒たちに向けたものだ。先生に見つめられると、僕たちは一瞬だけ静まりかえった。でも、それは長くは続かない。先生が再び口を開き、何か珍しい昆虫の生態について説明を始めるや、前の座席のオグニクは僕の方を振り向いてビー玉を投げつける。僕は僕でフクロウの鳴き真似を始める。

ボグダーノビッチ先生はまた説明を中断して、顔を上げる。

「静かに」

声には出さないが、灰色の目がそう言っていた。

なぜ、声を出さないのか、叱りつけないのか、どうも陰険な感じがして、僕はボグダーノビッチ先生を好きになれなかった。

I が好かないという言い方がピッタリかもしれない。僕がボグダーノビッチ先生の授業で悪戯をしない日は無かったと思う。きっと、どうしても先生を本格的に怒らせたかったんだね。

ある日、僕は学校に壊れたフライパンを持ち込んだ。真ん中に大きな穴が開いていてフライパンとしては寿命が尽きていたが、僕にとっては好都合だった。フライパンの縁に沿ってスプーン

走らせると、キーンゴゴゴと耳障りな音がする。

机の下でフライパンとスプーンを操作しながら、僕は真面目な顔をして先生の話に聞き入っている風を装った。先生はテントウムシの生態の話をしてしたが、僕は真剣さを強調するために、右手で頬を支えた。フライパンは机の下の板の上に載せてあり、左手で持つスプーンの先でフライパンの縁をなぞっていた。

ボグダーノビッチ先生は、物音に気付いていぶかしげに首を傾げ、話を中断した。しばらく鳴り止まない物音に聞き入っていた顔が怒りの表情を見せた。首筋から耳の付け根、耳たぶがみるみる赤くなっていく。僕はザマアミロという心境で、なおも左手の動きを止めなかった。

いつのまにか、ボグダーノビッチ先生は僕の正面に立っている。罵倒されるのを覚悟して立ち上がった。どんな罵り言葉が飛び出してくるか、楽しみでさえあった。

先生の口元は震えていた。怒りのあまり興奮していたのだと思う。やっこのことで出てきた台詞は途切れ途切れだった。

「キッキッキキミは、何なんだ、それは!? 機関銃か!」

それだけ言うと、Ⅱを返して教壇の方へ走っていった。それから先生はクラス日誌を開いてペンを手にした。ペン先は赤いインク壺に浸された。

「キミに関しては、ここにクレームを書き込ませてもらうよ」

そう言う先生の声は今にも泣き出しそうだったし、灰色の目には涙が光っていたような気がした。その一瞬、僕は先生が可哀想になった。悪かったと反省もした。でも、それは、ほんの一瞬のこと。次の瞬間には、すでにボグダーノビッチ先生を呪っていた。

「ふん、嫌なヤツだ。やり方がいつものとおり、陰険だ。直接叱りどばせばいいものを、何でクラス日誌なんぞに書き込まなくてはならないんだ。こんなことされたら、体罰好きの担任に打ち打たれるのは目に見えてるし、親にも通達されてしまう。親父からも殴られる。それに年間成績にも響くじゃないか」

僕にとっては運命の言葉を日誌に書き込むペン先が震えているのを見つめながら、そんなことを思った。

「座りたまえ」

ボグダーノビッチ先生は、ペンを置くと落ち着きを取り戻した声で言った。

「日誌に書き込んでおいたから、担任の先生がキミをしかるべく罰してくれることだろう」

僕は席に着き、先生はA先ほどのテントウムシ

の話が続けた。僕は今度はまるでBビクともしな

かった。胸のところを腕を組み、先生の口元を凝視していたが、

その口元から発せられているらしい言葉はなにひとつ僕の耳に届かなかった。

それから [C] 毎日が続いた。担任教師の授業時

間中は、 [D] せわしなく震えていた。担任がいつあ

の頁を開き、ボグダーノビッチ先生の書き込み気付いて、僕に罰を与える瞬間が訪れるのかを戦々恐々として待ち受けていた。

意識の中では何度も、教室の黒板の前に呼び出され、ズボンを脱いで尻を出すよう命ぜられるまでの場面を反芻した。

一週間もすると、僕の神経はヘトヘトに疲れ果て、僕はほとんど病人だった。なのに、担任教師には一向に僕を罰する気配が感じられなかった。それは、^①恐怖だった。恐ろしくて気が狂いそうだった。

それとともに、ボグダーノビッチ先生に対する僕の憎しみは日増しに膨張していった。

ある晩、僕は耐えきれなくなって町はずれのボグダーノビッチ先生の自宅近辺まで足をのびした。大きな菩提樹の木陰から先生の部屋の窓めがけて石を投げつけた。命中してガシャンとガラスの割れる音が辺り一帯の静寂を破った。

翌日の夕刻、再びその家の前まで行き、^②割れたガラス窓に新聞紙があてがわれているのを確認して満足した。

「お前なんか、凍えて風邪をひいちまえばいいんだ！」

心の中でそう叫ぶと、僕は駆けだした。ちょうど雨が降り始めてまたたくまに雨足が強くなっていく。風が錆色の雨雲を強引に追いついていく。その風が突然僕の割った窓に向かって襲いかかり、窓の中に風を入れまいと惨めに頑張る新聞紙を叩き始めた。

これで、ボグダーノビッチ先生と僕との拘りは終止符を打ったはずだった。少なくとも、僕の心の中では落とし前がついていた。ところが、まだ続きがあったんだ。

半年後の五月、学年度が終わりに近付いていたある日、ボグダーノビッチ先生の授業中、武装した五、六人のウスタシユの男たちが突然教室になだれ込んできて、全員を校庭に追い立てた。先生方は、生徒たちの身体検査をするよう命じられた。ボグダーノビッチ先生は、僕たち一人一人のそばへ来て上着やズボンのポケットをひっくり返すように命じ、身体を手でまさぐり、靴を脱いでみせるように言った。僕の隣には、ヨワンカという少女が立って震えていた。^③先生が近付いてくるほどにヨワンカの震えは激しくなった。ついに、先生がやって来てポケットを裏返すように命じた。ヨワンカの右のポケットは空だった。左のポケットからはくしゃくしゃに丸められた紙切れが出てきた。

「先生、お願いです。私を突き出さないで」

ヨワンカはか細い声で言った。先生は丸められた紙切れを引き伸

ばした。僕は紙切れに視線を走らせ、そこに赤い星のマークがあるのに気付いた。あれは、パルチザンのマークだ。先生は、落ち着き払った様子で紙をたたみ自分のポケットに突っ込んだ。それから、何喰わぬ顔をして僕の次にオグニクの身体検査をした。クラス全員
の検査を終えると、先生は武装した人たちのところへ行って、報告した。

「いま見た生徒たちには何もありませんでした」

他の教師たちの報告も同じだった。

「そんなはずはない！」

将校と思しき人が声を荒らげた。

「それでは誰が校内にビラを持ち込んだんだ!？」

将校は考え込むようにうつむいたが、すぐに顔を上げてニンマリと微笑んだ。

④「では、先生方の身体検査は手前が承りましょう」

僕は身体が強ばった。ヨワンカの震えがさらに激しくなった。

将校はまず数学教師、次に化学教師を、さらに数人の教師たちを
検査していき、ついに生物学のボグダーノビッチ先生の番になった。

ポケットを裏返すよう命じられた先生は命令に従った。黒っぽい背
広の生地にポケットの裏地の明るい色が浮き立ったと同時に、紙の
塊がズボンの縫い目に沿って地面に落ちていった。将校は腰をかか

めて紙切れを拾い拵げた。

「先生、これをどの生徒さんから見つけましたか」

「それは、私が持ち込んだビラです。生徒から取り上げたものでは
ありません」

生徒も他の先生方も解散を命じられたが、ボグダーノビッチ先生
は連行されてしまった。

なぜ、先生が生徒の罪を被ったのか、僕には分からなかった。そ
れが分かったのは、五日後、もう先生がこの世から消されてしまっ
てからだ。そのときになって、やっと分かったんだ。先生がヨワン
カのこと僕たちのことも僕のこともとつても愛してくれていたっ
てことをね。

僕は、それからというもの、先生が書き置いたコメントに担任が
気付いて僕を罰してくれるのを心の底から待ち望むようになった。
でも、その気配は一向にない。

ある日、意を決して担任に尋ねてみた。担任の先生は日誌の頁を
一枚一枚めくりながらくまなく見渡した上で、言った。

「何かの勘違いではないかね。キミについては何も書き込まれてな
いよ。理由もなく罰するわけにはいかんからねえ」

⑥目の前が真っ暗になった。足の力が抜けて倒れそうになった。取
り返しのつかないことをしてしまった無念さは、今も僕の胸にある。

中学を卒業して迷うことなくパルチザン隊に入ったのは、先生を殺した奴らがわれわれを支配し続けることに我慢ならなかったからなんだ……。いや、ずいぶん昔のことをつい長々とお聞かせしてしまった。

(米原万里『嘘つきアーニヤの真つ赤な真実』)

※風采の上がない……さえない。

※クレーム……苦情。

※反芻……くり返し考えること。

問一

I には漢字一字、II にはひらがな三字を入れて慣用句を完成させなさい。

問二

線 a 「浴(って)」、b 「支(えた)」、c 「首筋」の読みをひらがなで答えなさい。

問三

A ㄣ D にあてはまるものを次からそれぞれ選

び、記号で答えなさい。

ア、石像のように

イ、木の枝にぶら下がった枯れ葉のように

ウ、薄氷を踏むような

エ、何事もなかったかのように

問四

線①とありますが、どうして「僕」は「恐ろしくて気が狂いそうだった」のですか。六十字以内で説明しなさい。

問五 —— 線②の「の」と同じ働きの「の」が使われている文を

後から一つ選び、記号で答えなさい。

割れたガラス窓に新聞紙があてがわれているのを確認して満足した。

ア、ヨワンカの右のポケットは空だった。

イ、僕は紙切れに視線を走らせ、そこに赤い星のマークがあるのに気付いた。

ウ、先生は武装した人たちのところへ行って、報告した。

エ、取り返しのつかないことをしてしまった無念さは、今も僕の胸にある。

問六 —— 線③とありますが、ヨワンカが震えているのはなぜで

すか。五十字以内で説明しなさい。

問七 —— 線④とありますが、ここで「僕」の「身体が強ばった」

理由を説明したものととして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、ウスタシユの将校が今度こそボグダーノビッチ先生が持ち込んだビラを探し出し、先生をひどい目にあわせるにちがいないと考えたから。

イ、ヨワンカが持ち込んだビラが、今度こそボグダーノビッチ先生から発見され、二人に恐ろしい仕打ちがなされるだろうことを感じたから。

ウ、ボグダーノビッチ先生が今度こそヨワンカが持ち込んだビラをウスタシユの将校に差し出し、ヨワンカを突き出すにちがいないと考えたから。

エ、ボグダーノビッチ先生が、「僕」に対する罰として、今度は「僕」がビラを持ち込んだと、ウスタシユの将校に言いつけるのではないかと恐れたから。

問八 ——— 線⑤とありますが、「僕」はボグダーノビッチ先生の

ことをどのように理解したと考えられますか。最も適当なもの
を次から選び、記号で答えなさい。

ア、命をかけるくらい気持ちで「僕」の激しい感情に向き合

い、同情を寄せてくれていたのだと理解した。

イ、ヨワンカと同様に、「僕」がパルチザンの活動に加わるこ

とを応援おうえんしてくれていたのだと理解した。

ウ、自分を犠牲ぎせいにして憎まれ役となっても、「僕」を大事に考

えて、育てようとしてくれたのだと理解した。

エ、「僕」がどんなにひどいはずらをしようと、「僕」の気付

かないうちに許してくれていたのだと理解した。

問九 ——— 線⑥とありますが、このときの「僕」について説明し

たものとして適当なものには○を、適当でないものには×を
解答らんに入れなさい。

ア、担任からのむち打ちの罰があるに違いないと思ひ込み、ひ

たすらおびえる毎日ですごしてきたが、全くの見当違いで

あったことを知り、脱力感だつりよくかんを覚えている。

イ、ボグダーノビッチ先生には最初から「僕」にむち打ちの罰

を受けさせる気がなかったことを知り、先生のやさしさに

心を打たれている。

ウ、担任の先生までが、「僕」をかばってくれたのだというこ

とに今さらながら気づき、自分の未熟さを強く恥はじている。

エ、罰を受けることでボグダーノビッチ先生の思いにこたえ、

先生へのひどい仕打ちをつぐなおうとしていたのに、それ

ができないことを知って強い後悔こうかいを覚えている。

問十 〜〜〜線「風が錆色の雨雲をく新聞紙を叩き始めた。」とあ

りますが、この情景描写は「僕」とボグダーノビッチ先生の関係を象徴しょうちゆうしていたとも言えます。その内容について説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、「僕」の授業中のいたずらや暴力的な仕打ちに対し、ボグダーノビッチ先生は全く無力であり、最終的には「僕」が優位に立つことを示している。

イ、ボグダーノビッチ先生をひどい目にあわせた「僕」に対し、担任からのむち打ちという形で、そのうち先生が「僕」に仕返しをすることを表現している。

ウ、ボグダーノビッチ先生を恐れている「僕」の願い通り、先生はやがて命を奪うばわれ、学校に來られなくなってしまう運命にあることをほめかしている。

エ、「僕」がボグダーノビッチ先生を強く憎み、攻撃こうげき的ですからあるのに対し、先生は「僕」の乱れた思いをひたすら受け止めていたことを表している。